

令和4年度部署目標 結果報告



社会福祉法人友愛会
特別養護老人ホーム山県グリーンビレッジ



令和4年度 ユニットフロア目標

「利用者と職員の間と身体に寄り添う介護」 (目標を設定した背景)

●利用者

- 剥離が目立つ。また、原因が不明で、同じ利用者の方が多い。その原因を探り、剥離を減らしていく中で、剥離を防ぐ為にはどのような介助方法が良いか、予防できるか考え介助を行う。行う過程で、危機管理能力を高めていく。
- 利用者の方のADLの維持を目指す。各フロアで利用者を選定し、1年後にも現在の状態が維持できているように取り組んでいく。

●職員

- 腰痛予防の為に、ノーリフトを推進。少しずつだが、意識が変わり持ち上げない介護を行っているが、不十分である。職員全員が1人の利用者の方に対し、同じ介助方法で行えるようリフトやスライディングボードを使用し、負担軽減を図る。



①腰痛予防

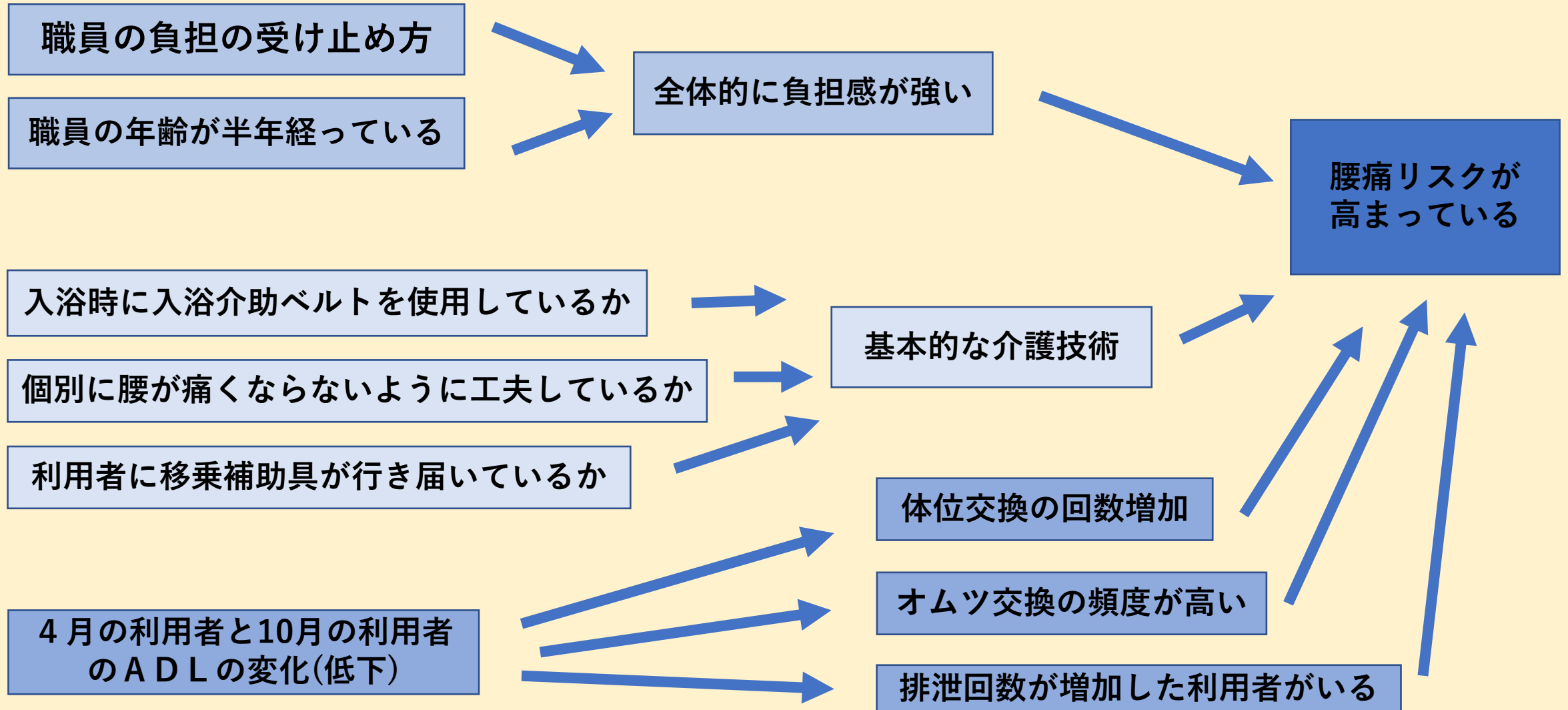
- 各ユニットでスライディングボードやシートを使用する対象者をフロア会議で検討決定し、介助方法を統一していく。
- 6月から開始、6月・9月・2月にアンケート実施、集計、まとめを行う。

(対象者)

- ・うめ：S・Iさん
- ・もみじ：Y・Kさん
- ・いちよう：T・Hさん



腰痛アセスメント因果関係図

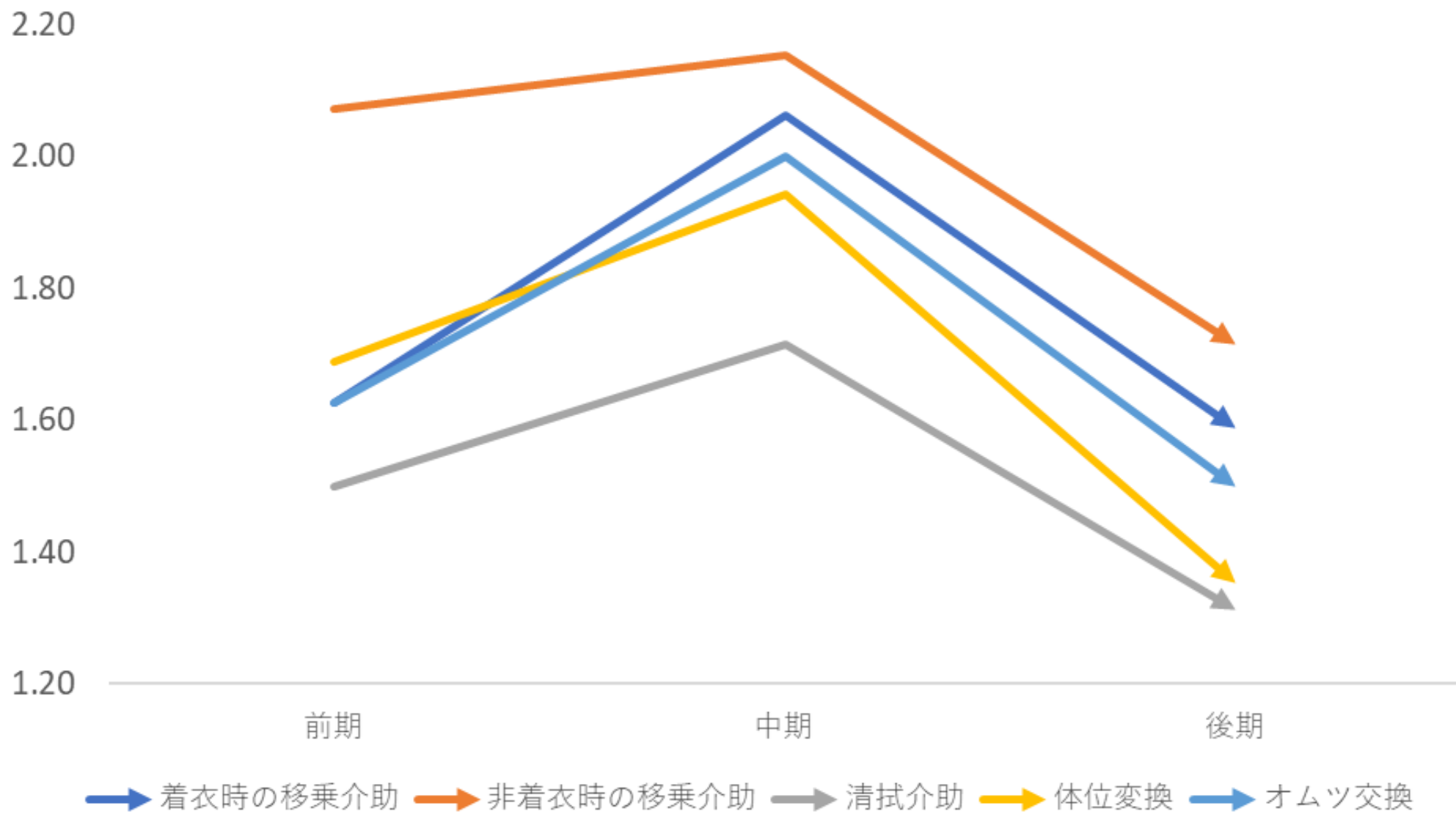




腰痛予防対策チェック
リストでのアンケート
において、以下の数値
に置き換えて集計した。

高リスク = 3点
中リスク = 2点
低リスク = 1点

各項目のリスク





まとめ

- 全体的に腰痛のリスクが軽減できた。
- 作業時間では、補助具の使用について慣れてきたことや、余分な動きが少なくなったことで時間短縮ができるようになった。また、自己にてやり易い方法を見つけることができた。
- 意識づけすることで、意識の向上ができた。
- 上手に活用している職員ややり易い方法を、教え合うことができた。
- 自分の腰痛予防の為に、使用できそうな利用者の方へボードを使用する職員もいた。



②皮膚剥離

- 皮膚剥離のインシデントレポートが提出されたら、それに対しての是正を必ず全職員で周知し、再度同じ事が起こらない様に介助していく。
- 自己にて剥離を起こされる方に対しては、普段の様子観察を行い、どのような対応をしたら、剥離を防ぐ事が出来るかを考え発信していく。



うめユニット

利用者名	インシデント・アクシデント内容	原因	是正案
M・K	12月13日7時半：車椅子移乗時、左手甲の以前剥離あった個所から出血。	移乗の際自己にて職員の腰から手を離し、柵と柵の間に手を入れ出血。	ベッド柵を外し移乗。声掛けし、しっかりと掴まってもらう。
S・I	1月3日10時：排泄交換時、左肘外側に剥離発見。	体勢を整える際にアームサポートに当たる。自己に動かれ、アームサポートの内側に肘が入り込んでしまう。	身体の傾きがみられる際は注意し介助する。
S・I	1月23日13時半：入浴時右肘に剥離発見。	バスタオルで保護していたが、動かれ剥離。	自己にて動かれる為、手や腕の位置確認し介助行う。
S・I	1月30日14時：入浴後、右肘に剥離を発見。	アームサポートを下げ介助行い、職員も注意し介助行っていたが、起きた。自己にて動かされ、起きた。	トゥッティーで入浴し様子見る。
T・I	10月19日18時半：移乗時剥離。	立つ際に自己にて動かされ、車椅子のタイヤの取り付け部に触れる。	フットサポートをクッションで保護し移乗する。



もみじユニット

利用者名	インシデント・アクシデント内容	原因	是正案
S・I	6月20日0時：排泄交換時アームカバーに血液付着、1cm大の皮膚剥離発見。	自己にてアームカバーを外したり、手を動かされたりする為起こった。	剥離をしやすい皮膚状態である事を認識。アームカバーを使用しているが自己にて外される為、見守り・着用する様声掛けする。
S・I	7月24日：服の袖に血液付着あり確認、右前腕部に皮膚剥離発見。		剥離をしやすい皮膚状態である事を認識。巡視毎にアームカバーを着用しているか確認する。
S・I	11月22日：左前腕に2センチほどの剥離あり。	自己にてアームカバーを外したり、手を動かされたりする為起こった。	臥床時こまめにアームカバーの装着促す。
Y・K	1月20日：浴室でトゥッティーに移乗介助後、2人介助にて移乗する。洗体時に剥離見つける。	自己にて、手を動かされる為起こった。	トゥッティーのサイドにクッションを当て入浴。



いちょうユニット

利用者名	インシデント・アクシデント内容	原因	是正案
T・H	6月21日23時 コールあり訪室。左頬付近の吹き出物がつぶれて出血があった。バンドエイドで処置する。	自己にて触り、吹き出物がつぶれたと思われる。	皮膚状態の観察、早期発見に努める。
M・Y	6月11日10時 トイレで触診時、手足を動かされる。右手首に1.5cm×3cmの皮膚剥離を起こした。	指示が通らない事多く、何をされるか分からずに手足を動かされた時に起こした。	狭いトイレ内では今後も起こり得る為触診が必要な場合はベッド上で行う。
M・Y	7月22日10時30分 個浴の浴槽に入る為に足を上げる。その際に右腕の下側に3cm大の皮膚剥離を起こした。	足を浴槽に上げる際に右腕の下側が個浴の手摺に当たっており起こした。	介助時は手摺り等に本人の体が触れていない事を確認してから介助する。
M・Y	12月28日8時30分 排泄交換の為布団をめくると、右前腕に10センチ大の皮膚剥離あり。	ベッド柵に当たって起こした。服で擦れたり、自己にて動かされ剥離が大きくなった	内出血や剥離を起こしやすい方である事を意識する。自己にて動かれる方である為、皮膚状態の観察を行う。



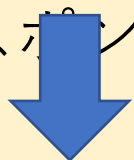
皮膚剥離を繰り返す利用者

S・Iさん(うめ)、Y・Kさん(もみじ)

入浴時に多い。
職員注意し介助行っているが、自己にて動かれ、剥離を繰り返す。



寝浴または椅子浴から、トゥッティ浴へ変更。
体の両脇にスポンジを挟み極力摩擦を少なくした。



変更後、皮膚剥離なし

M・Yさん(いちょう)

トイレでの摘便時に多い。
抵抗され手摺捕まると手を離す事が困難。



摘便はベッド上対応に変更。
尿意ない為、無理に定時のトイレ介助を行うのを中止した。



変更後、皮膚剥離なし



③ADLの維持

●例：立位困難であるトイレ希望の利用者を、現在朝昼2人介助にてトイレ誘導している。概ねトイレにて排泄があり、今の機能を維持できるように支援していく。

K・Aさん(いちょう)

トイレでの排泄を促し、立位の機会を確保が維持出来る。

S・Iさん(もみじ)

朝昼、2人介助にてトイレ誘導し、排泄を促す。

T・Iさん(うめ)

Pバーに掴まり、車椅子⇔ベッドへの移乗を行う

1年間を通してADLを維持することができた。



令和4年度 2階フロア目標

「利用者、職員にとって負担の無いよう無理をせず安全な介助を行う」

◎設定目標 1

前年度、利用者の転倒が続き骨折というアクシデントもあった事から、転倒防止に努めることとした。

・取り組み内容

転倒リスクのある利用者の要因は各々異なっており、日中と夜間でも違いがみられる為、要因を探り対策を立て経過を見る。多人数の利用者を見守る事で予測の視野も広げ観察・洞察力を磨く



※結果

前期 転倒及びびすり落ち：10件
ホール：4件
居室：3件

- ホールにおける転倒、監視カメラにて確認すると1件は車椅子から立ち上がり伝い歩きをしようとして転倒。職員はいたが立ち上がりに気付いていれば防げた。別の1件はソファに座っているであろうと思い、職員が複数いたが見守りができていれば防げた。



5月27日・・・K・Hさん

トイレ介助にて離れた直後仰け反るように転倒。

翌日、受診にて左大腿骨頸部骨折と判明。

確実に便座に座らせ介助を行っていたら防げた事案

- ホールでの転倒事案は監視カメラの確認、どういう動きにて転倒に至ったか、原因は何であったかを検討し防止に努めた。



後期 転倒及びずり落ち：15件
ホール：3件
居室：7件
トイレ：2件（居室及びトイレ9件中6件は3人が各2回）

※2階フロア利用者34名（ロングショート3名） 3月時点

- ・居室6名（胃瘦者3名 看取り2名 Hさん）
- ・歩行者5名
- ・車椅子自走者12名（男性：7名・・・4名が70代）
- ・車椅子介助者11名

令和4年度は車椅子自走の男性が多くなった。



目標1まとめ

※後期居室での転倒、移乗からのずり落ちが12月から1月にかけて多く、要因として12月コロナ感染から居室対応となり体力の衰えから、ふらつきがみられるようになった事が考えられる。

もう一点は車椅子自走の男性利用者が、ずり落ちにより対策を立てても自己にて身の周りの事をしたい意思が強く繰り返す要因となっている。例えばH利用者はベッドをセンサー対応にし居室内で動きやすいようにと配置を変えても、自己にて元に戻る。

K利用者はブレーキをかけ忘れ移乗する。S利用者はトイレを自己にて済ませたいとしバランスを崩される時があった。

居室やトイレ等見守れない場所での本人たちの意思も尊重しながら大事に至らないようにする事が今後の課題と思われる。

一年を通してN・Mさん4回有り、その都度対策をたてるものの見守りが甘かったり、本人も活発になられ思わぬ動きもあり状態の変化を見極めて対策をたてる事が難しい事も学んだ。



◎設定目標 2

職員が目指す負担の無い介助

利用者の年齢の幅が60代から90代までと広く、身体の大い利用者も増えている。用具の使用や二人介助を行う等して職員誰もがリスク無く介助できるようにする。

目標 2 まとめ

1年の間で利用者の移り変わりはあったものの、その都度話し合い機能訓練員に相談しながらリフトの使用1名、スライディングボード使用3名、併せて二人介助行い利用者、職員に負担の無い介助を行った。守られず利用者に何らかの異常がみられた時、職員の力加減により同じ利用者を介助を行うも、利用者に負担を与える事もあるので、お互いに負担を無くすにはどのようにするかフロア会議で検証を行い徹底を図った。



令和4年度 3階フロア目標

「傾聴力を身につける」

利用者の話を受け止め、共感し、受容する事で介護職員もスムーズに仕事を取り組めると考えた。その中で可能な限り利用者の要望を叶えたいという思いで1年取り組んだ。



1, Kさんの場合

- 「歩きたい」と希望があり相談員から家族に本人の希望とリスクを説明。車椅子を押して歩いていたら目的地まで付き添い歩く援助を行う事で本人の満足感を得られた。

2, Fさんの場合

- 看取りで入所された方であったが、介助中や介助後に話し相手となる事で発語が増え活気が出てきた。本人の生きるという思いも強くなり出来る事は自分でやりたいという意思が強くなった。
- 「刺身が食べたい」と希望され行事食でお寿司を食べてもらえた。今では看取りが解除となり喫茶にも定期的に参加されQOLの向上が見られる。

**「傾聴する」という事が利用者に信頼され心を開いてもらう
第一歩であるという事を大きく学べた取り組みだった。**



令和4年度 医務 目標

目標 : 結核感染の再発防止

具体的方法 : フローチャートの作成

症例1 : K・Kさん T-spot検査陽性

フローチャートに沿って、長良医療センター受診

症例2 : H・Iさん T-spot検査陽性

フローチャートに基づいて、入所前に活動性を認めなかったことを確認

令和5年度も継続して感染防止に努めていきます。



結核感染拡大防止フローチャート

